

令和3(2021)年度水稻生育診断予測事業速報 No. 2

(早植栽培6月8日調査結果)

令和3(2021)年6月10日

栃木県農政部経営技術課

現在の生育は、ほぼ前年並みであるが、地域によって差が大きい。

茎数が少ないほ場は水温を維持し分けつの増加を促し、多いほ場は過剰にならないよう注意する。必要な生育量(生育診断値)が確保され次第、速やかに間断かん水を開始する。

1 気象概況<<5月下旬～6月5日(宇都宮)>>

平均気温は5月下旬が平年より0.3℃高く、6月第1半旬は同0.6℃高かった。日照時間は、5月下旬は平年比84%、6月第1半旬は同89%と少なかった。降水量は、5月下旬は平年比171%、6月第1半旬は204%と多かった。期間を通して、やや高温で日照時間は少なく、降水量は多い傾向であった。

平年の梅雨入りは6月7日ごろであるのに対し、今年の梅雨入りは5日以上遅い12日以降とみられる。

2 調査結果(表1-1、表1-2)

(1) 早植栽培・品種コシヒカリ

草丈は平年比101%と平年並、茎数は同118%と多く、葉齢は同0.3葉多く、葉色は同0.2淡い。生育診断値(葉色×茎数)は同85~120%とばらついている。

前回調査(5/25)時点では、草丈がやや高い以外はほぼ平年並の生育であったが、今回の調査では、茎数が198~600本/m²とばらつき、また同様に生育診断値(葉色×茎数)も789~2,787と大きくばらついている。

(2) 早植栽培・品種とちぎの星

茎数はコシヒカリと同様、191~527本/m²とばらつきが大きく、葉色は平均4.6とコシヒカリより濃い。生育診断値(葉色×茎数)は919~2,149の範囲にある。

3 技術対策

気象庁の「関東甲信地方1か月予報」(令和3年6月10日発表、6月12日から7月11日までの天候見通し)では、“平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう”と予想されている。気温は平年並または高い確率がともに40%、降水量は平年並の確率が40%、

日照時間は少ない確率が40%である。梅雨入りを前に天候不順にも対応できるよう、以下の点に注意して栽培管理を行う。

(1) 水管理

すでに必要茎数（コシヒカリで360～380本/m²程度）が確保されているほ場では、速やかに間断かん水を開始し、過剰分げつにならないよう留意する。茎数が確保されていないほ場では、引き続き、夜間かん水、日中止水（浅水）とし、分げつ発生を促進する。

過繁茂になると穂数・籾数の過剰、登熟低下、白未熟粒の発生、食味低下を招きやすい。また、分げつが多く茎が細くなると、倒伏を助長するため、必要茎数が確保できしだい、速やかに間断かん水に移行することが重要である。

(2) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

「植物防疫ニュース（速報 No. 3）」（令和3（2021）年6月7日農業環境指導センター発表）では、イネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率は県平均3.6%、生息密度は県平均31.2頭/10m²で、保毒虫率、生息密度ともに例年より低い状況である。しかし県中南部では、防除が必要とされる10%に近い地点が複数あり、本病の発生拡大を防ぐため、地域ぐるみでのヒメトビウンカ防除（発生の多い地域では、箱施用剤の使用に加え本田で薬剤散布）を実施する。

イ いもち病（葉いもち）

BLASTAMによる葉いもち感染好適条件判定結果では、6月に入って準感染好適条件が出現し始めている。

(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/file/data/Blastam/2021.htm>)

いもち病は気温25℃～28℃で湿度の高い条件で感染拡大がすすむことから、梅雨に入ると発生が多くなるので、常発地域、箱施用剤を使用していない地域では、ほ場を良く見回り、早期発見・早期防除に努める。

なお、いもち病の防除は、発生前の予防剤（粒剤）施用が効果的である。また、いもち病の発生源となる取置き苗は早急に処分する。

※ 薬剤（登録農薬）はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>)